学校教育目標　　〇まじめな子　　〇あかるい子　　〇がんばる子

安行小だより

目指す学校像

安行小学校１２月号
令和５年１２月１日
150 年開校記念日

よさを認め、学び合い高め合い、やる気と笑顔あふれる学校（個の伸長　公の育成）
～伝統と地域と共に励みて進む安行小１５０年～

最終的に残るものは教育よ

校長　春川　嘉孝

令和５年、一年間で最後のひと月です。小雪から間もなく大雪、冬至と続き、令和５年の一年間が暮れます。２日は「七十二候」で**「橘始黄」**（橘の実が黄色く色づきはじめる頃）。橘の葉は枯れることなく、**永遠の象徴**とされているそうです。

１２月１日。埼玉県川口市立安行小学校開校記念日。１５０年。

明治６年１２月１日「原村学校（医師である吉田宗作宅が教場）」として、安行小学校の歴史が始まります。学区は「原」「領家」「慈林」「安行」の四か村。児童は７５名。教員は２名。校舎の新築には、村有廃寺跡の立木を伐採したものが使われたと沿革史にはあります。また、通学の安全を考慮し現在の場所に変わったこと、独立した校舎をもっていたのは、安行小のほか３校しかなかったことなど。それから、何度か学校名を変えながら明治４２年に「安行村立安行尋常小学校」となります。当時の校長は、安行教育の父と言われる「三上重徳先生」です。三上先生は明治４０年から昭和５年まで教員、校長として安行小の基礎をつくっています。お二人にとって「教育」とはどのような意味をもっていたのか。江戸から明治へと変わる中、人々の生活も考え方も大きく変化したと思います。また、関東大水害、関東大震災などの災害をも乗り越え、学びを継続し、充実させたという「教育」への思いは。

あれから１５０年を経て学びの環境は大きく変わっています。１００年前に夢見た世界を、はるかに超える便利な道具ができ生活は一変しました。安行の地で、自然の豊かさ、自然の大切さにふれながら、今、安行小に通う子供たちが「励みて進む学業」と「体を鍛え伸び行く姿」となるために、引き続き、皆さんと手を携えながら取り組んでまいります。そして、安行小が安行の地で永遠の象徴となるように。

さて、１２月号のタイトルにある言葉は、第８代国連難民高等弁務官に就任し、世界各地の紛争地帯で難民支援活動に取り組まれ、紛争地等の平和活動に力を注いだ「緒方貞子さん」の言葉です。貧困、飢餓、自然災害、児童労働、紛争など、世界では、まだまだ大きな問題は解決できていません。その中で、いかに「教育」が大切であるかを訴えた言葉でもあります。

世界の中では、教育を受けたくても受けられない（学校に通えない）子は、初等教育で「１１人に１人」（2021 年：ユニセフ統計）と言われています。貧困、紛争、災害等による避難、児童労働、風習など、様々です。

ある NGO が主催したワークショップで「父親、母親、娘、村長、校長、雇い主」に分かれてロールプレイングを体験したことがあります。「娘は学校に行きたい」「母親は自分が通えなかったので娘には学校へ行ってほしい」「校長は何とか入学させたい」その気持ちを伝えていくけれど。「父親」「雇い主」から発せられる言葉は・・・。学校に通うことの意義は理解しているかもしれないけれど、現実やその国の風習や考え方ではどうにもできないことを感じたことがありました。

「学校に通えないと困ること」は何でしょう？　ぜひ、ご家庭で話し合ってみてください。
教育を受けることができたことによって「自分にも夢をもつことができた」「将来への希望をもてた」「自分に自信がついた」。そのように考えることができるようになったという話もききます。１５１年めの安行小の発展を共に願いましょう。「教育は未来への先行投資」。